
月夜の般若

岡田久太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の般若

【Nコード】

N5334D

【作者名】

岡田久太郎

【あらすじ】

祐介が仕事を終えて家に帰ると、妻が出てきた。夜空に輝く月のせいか、妻の顔は白っぽく、張り詰めて見える。どこかでこの顔を見たことがあった。そう、あれは二十年前の月夜の晩だった――

「パパ、どこに行ってたの」

祐介が自宅の門扉を開けるや否や、妻の伸子が家の中から出てきた。

「仕事だけど」

「いつもより遅いじゃない」

「ちよつとね」

「ちよつとじゃわからない」

夜空に高く輝く月のせいか、伸子の顔は白っぽく見えた。そして険しかった。

祐介は、どこかでこの顔つきを見たことがあると思った。そう、あれは二十年前の月夜のことだった。

二十年前、中学生だった祐介は九州のある小都市に住んでいた。家族で住んだ家は、人家がまばらな丘の上にあった。

夜になると、勉強の合間の休憩と称して外に出た。そして、小遣いを貯めて買った望遠鏡で夜空を眺めた。と言っても、天体観測に詳しい訳ではなかった。星や月を眺めてぼんやり過ごすのが好きだった。宇宙に比べれば、学校での出来事や勉強などはちっぽけなことに思えた。

受験が間近に迫った一月の夜の十時過ぎ、寒かったがそれだけに空気は澄み、月が青白い光を投げかけていた。星を見ていた祐介は、耳なれない音が聞こえてくるのに気付いた。

猫の鳴き声か、と思い耳をすますと、しゃくり上げるような泣き声だった。子供ではなく、大人の女が泣いていた。

暗い夜道を歩くのは気味悪かったが、女の泣き声は中学生の好奇心をくすぐった。祐介は泣き声がする方に歩いていった。五十メー

トルほど歩いただろうか、数軒先の家の中で女が泣いていた。祐介は垣根の隙間からその家を覗き込んだ。

カーテンが引かれて家の中は見えないが、一階の居間と思しき所から大きな泣き声が聞こえてきた。途切れ途切れで何と言って泣いているのかわからない。

ただ、「どうして……、許せない……」とは、断片的に聞き取れた。泣いている女の声はまだ若い、二十代だろうか。

女の傍らでぼそぼそと低い声が聞こえた。耳をすますと、「周りに聞こえるから」、「みさちゃん、しょうがないよ」と言っている。母親のようだ。

息を潜めて覗いていると、突然カーテンが捲くられ、ガラス戸がぱたんと開いた。

「あんた、そこでなんばしよつと」

女が外に顔を突き出し、祐介を睨みつけて叫んだ。月光に照らされた女の顔は涙で濡れ、大きく開かれた目は充血していた。叫ぶ口は耳近くまで裂けているように見えた。それまで見たことがない恐ろしい顔だった。祐介は転がるように逃げ帰った。

あの女はなぜあれ程泣いていたのか、中学生の祐介にはわからないまま時が過ぎ、いつしかその夜の出来事自体も忘れてしまった。

目の前にいる伸子の顔つきはあの女と似ていた。これで二本の角が生えれば、嫉妬、悲しみ、怒りに狂った般若の能面だ。

「夕方、一緒にいた女の人は誰なの」

伸子の顔も張り詰めている。祐介にはようやく事情がわかった。仕事の帰りに、たまたま出会った部下の女の子と駅のそばの居酒屋で飲んできた。それを見られたらしい。

どう説明するか、祐介は気が重くなった。だが一方で、あの女が泣いていた理由がやっとわかったような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5334d/>

月夜の般若

2010年10月9日06時54分発行